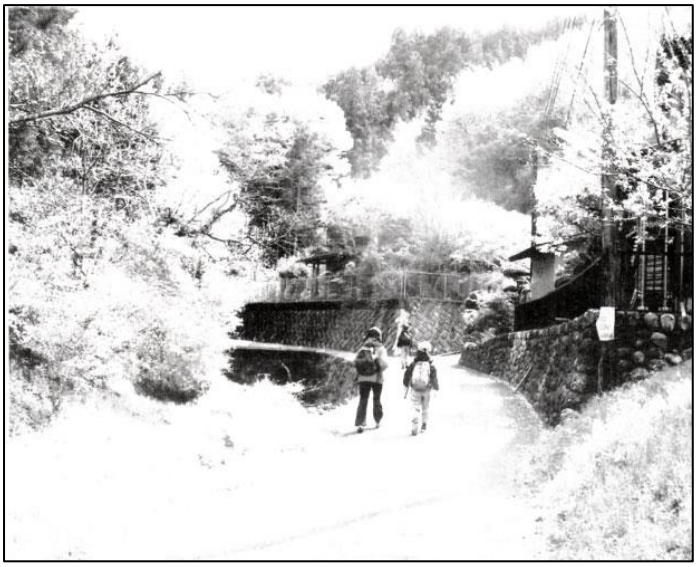
真理通信

第 99 号　平成 31 年
(2019 年)3 月 1 日発行



叙 景　　表紙を語る

春は、野歩き山歩きに最適な季節です。美しい緑、そしてほころび始めた花々
を見ながら、ゆっくりと歩きたい。冬の寒さにちぢこまった身体を、のびのびと
動かし、春の風を胸いっぱいに吸いこめば、新しい季節への意欲が自然とわいて
くるような気がします。

子どもと一緒に近郊の山歩きをしていた頃、秩父の山の入り口で撮った一枚。
遠い家族の思い出です。

巻頭

ふるい立てよ　放逸に流るるなく
善くなさるべき　法を行(ぎょう)ずべし
法に従いて行ずる人は　この世においても
また　ほかの世においても　こころよき休(やす)らいをえん
(法句経　168)

◇新：法句経講義５７◇

＜※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。＞

人が生きるためには、目標が必要です。

何となく生きている、というのは、「放逸」(ほういつ)なことです。放逸というのは、わがまま勝手、ということです。

生きるための目標を見つけるのは、大変なことです。簡単に見つかるわけではありません。人によっては、すぐに見つかる人もいます。でも大抵は、散々迷い苦しんで見つけるものです。

目標が見つかっても、すぐに実現できるわけではありません。今の自分の力では、とても無理と思えるかも知れません。お金がかかるかも知れません。家族やまわりの人に反対されるかも知れません。

でも、目標を持つことです。目標のある人生と、ない人生は違います。「法」を行(ぎょう)じるというのは、お釈迦さまの教えを行なうということです。でもそれも、自分が納得したものでなくてはなりません。

たった一度の自分の人生です。こうしたい、これで良かった、と思えるものにしたい。もちろん、そうならないかも知れません。でも、目標を持った人の人生は、違ったものになるのです。

＜　*主管所感*　＞

子どもであるということ　　友松 浩志

子どもは、言うことを聞かないものである。子どもは、うるさく騒がしいものである。もし、言うことをすべて聞く子どもがいたり、静かにじっとして動かない子どもがいたらその方が問題である。

子どもを虐待する事件が多発している。「しつけのため」といって、子どもを殴ったり叩いたりする。食事を与えなかったり、風呂に入れなかったり、服を換えずに放っている場合もある。ある学校で行なわれた連絡会に出て、そうした子どもの例があまりに多くてびっくりした。いったい、何がおこっているのだろう。

もちろん、過剰な通報もあるだろう。ちょっと怒鳴ると、通報される。通報の行き過ぎもこまりものだが、危険なくらいの罵声や、暴力には対応しなければならない。子どもの生命がかかっている。

今さら「子を持って知る親の恩」などと言ったら、某大臣のように叱責されるだろうが「子を持っても知れない親の恩」の時代である。「俺が」「私が」や、「自分第一主義」を貫く親には、子育ては無理である。子どもを持つと、自分のいく分かを割いて、自分を使う覚悟が必要である。

何故なら、子どもは「自分では生きていけない」存在だからだ。親にも子にももちろん人権はあるが、親は自分だけで生きていける。子どもは、自分だけでは生きていけない。子どもは、「附帯的存在」なのである。「附帯的存在」は、常に依存している。だから、どんなに殴られても叩かれても、そこにいるのだ。好きでそこにいるのではない。そこにいなければ、生きていけないから、そこにいるのだ。

子どもは、言うことを聞かない。子どもは、うるさく騒がしい。それは、親を信じているからだ。親に頼っているからだ。親を信じなくなった子どもは、何も言わないだろう。何も言わず、だまって、生きることをやめるだろう。

◆阿部明子先生 逝く◆
— 神田寺幼稚園の礎を築いて —

神田寺幼稚園の草創期に、教諭としてまた主任として12年余りご指導いただき、その後は、東京家政大学などで後進の育成を長く続けてこられた阿部明子（あかし）先生が、昨年2月28日に91歳で逝去されました。神田寺幼稚園の教職員にとって、常によき相談相手となって下さった先生は、日本の保育界全体の先頭に立つ指導者でもおられました。

神田寺幼稚園在職中に、日本女子大学大学院を修了された先生は、日本保育学会で「園外保育」に関する研究で受賞され、その後は絵画表現や、絵本・紙芝居などの研究を続けられました。

先生の原点には、常に保育現場がありました。そのご遺志を受け継いで行きたいと思います。

※「子どもの文化」阿部先生追悼特集号ご希望の方はお申出下さい。（送料とも400円　後払可）

△神田寺時代の先生（中央）

仏教豆知識　77	勧進

勧進（かんじん）には、2つの意味があります。ひとつは、人々を誘って仏さまの教えに導くこと。もうひとつは、寺社の造営、修復などのために財を求めることです。

長野の善光寺は、元来は浄土信仰の寺院でしたが、長い歴史のなかで天台宗の寺院ともなり、現在は天台宗の「大勧進」と浄土宗の「大本願」が管理しています。この大勧進も教えに導くという意味で使われています。

財を求める意味では「勧進帳」が有名です。源頼朝に追われた義経が、弁慶とともに、安宅の関を通り抜ける時、東大寺再建のための勧進帳を取り出す場面は有名です。全国を勧進のために歩くことが、よく行なわれていたことが分かります。

◆元旦の修正会に集う◆

本年も、元日午後2時から、修正会（しゅしょうえ）を行ないました。仏教聖歌を歌い、仏教勤行式をお唱えし、平成最後の年の平安を祈りました。

主管の講話は「道」のお話。昨年末に訪れたインドのこともお話しされました。法話のあと、記念撮影。その後、甘酒で歓談し新年の思いを語り合いました。今年も日本ヨーガ学会の方がたくさん参加されました。

△　修正会参加の皆さん

真理通信

第 100 号　令和元年
（2019 年）7 月 1 日発行

叙　景　　表紙を語る

暑い夏の日の太陽が、ようやくしずんでいく夕刻。ふと見上げた西の空に美しい
夕焼けがありました。都会の小さな空にも、こんな時があるのかと思わせる、
美しい時間と風景。

最近の都心では、電柱の埋設が進んでいますが、幹線道路以外はまだまだ電柱
は健在です。やたらたくさんの電線がからみついて、空への視界をさえぎりますが、
何かなつかしい。東京・豊島区の夕空です。

巻頭

過ぎたるにも　来たらんにも
はた　現在（いま）にも
いささかの　我有（わがもの）というものなし
所有（もつこと）なく　取（まつわり）なし
われかかる人を　婆羅門（ぱらもん）とよばん
（法句経　421）

◇新：法句経講義５８◇

＜※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。＞

自分のもの、とは何でしょうか。買ったもの？　もらったもの？　稼いだもの？　みんなそのようであり、そのようでありません。いづれにしろ、どんなに大事なものでも、あの世（死後）までは持っていけません。いづれも、仮り（借り）のものである。それに固執しても意味がない、というのが根本の教えです。

そのうえ冒頭部分で、過ぎた過去にも、来る未来にも、そして現在にも、自分のものはない、と言っています。まったくの無です。「諸法無我」（どこにも我というものはない）というのが仏教の基本概念ですが、すべてのものは相互作用で成り立っていて、単独で存在するものはないという考え方です。

「自分」とか「自我」というものを出発点にする近代の西洋哲学とはまったく反対の考え方ですが、「自分中心」の世界観が限界に達している今、改めて注目される概念です。

「自分」とか「自分のもの」から開放された時、人は本当の自由を獲得し、苦の世界を離れることが出来るはずです。人のまとめをする時、考えていただきたい課題です。

＜　*主管所感*　＞

生きる時間　　友松 浩志

「令和」と元号が変わって初めての発行、同時に本号が小誌第100号の記念号である。特に誌面を飾ることもなく、静かに迎える100号だが、それなりの感慨はある。この30年余りの間に、先代（諦道住職）を送り、新しい家族もできた。

時間というのは、ただ過ぎていくものではない。生きながらつくっていくものである。ボンヤリと何もしないで過ぎた時間は、何もなかったように空白である。仕事をしたり、子どもを育てたり、旅をしたり、本を読んだり、重い腰をあげて何かをすることで、人は時間をつくっていく。

中高年の引きこもりが、社会問題になっている。成人になっても、仕事もせずじっと家にいる人を引きこもりと言うらしい。家にいて、何もしない人は昔からいたように思うが昔は家族が多かったから、目立たずすんだのかも知れない。今は核家族だから、子どもが引きこもれば、老いた親しかいない。親の年金で、何とか生活していくことになる。

引きこもっている人は、本当に何もしていないのだろうか。スマホでゲームをしたり、本くらいは読んでいるのだろうか。スマホで何か稼ぎでもあれば、本を読みながら小説でも書いていれば、庭で花の世話でもしていれば、引きこもりとは言わないだろう。問題は稼ぎのあるなしではなく、どんな時間をつくり出しているかにあるように思う。

どんな暮らし方、生き方をしていようが、その人が自分の時間をつくり出していれば、それはその人の人生である。収入のあるなし、社会との交流ばかりに目が向けられるが、お釈迦様だって６年の修行中は没交渉だったし、法然上人だって比叡山の山奥のお堂に何年もこもってお経を読んでいた。

人生を生きるというのは、けして楽なことではない。でも、自分の人生、自分の生きる時間は、誰もつくってはくれない。自分でつくるしかない。それが自分の「生きる時間」というものである。

◆花まつりをお祝いして◆

今年も、お釈迦様のお誕生日をお祝いする「花まつり」が行なわれました。８日は生憎の小雨模様となり、「白象パレード」は町内をまわる短縮コースとして行なわれました。

また、小学校の入学式日程と重なり小学生の参加はわずかでしたが、たくさんの園児や保護者の方々においで頂き、甘茶がけなど盛大に行なうことができました。

△　花御堂のお釈迦様に甘茶がけ

△　神田寺正面に飾られた白象

仏教豆知識　78	殺生

殺生（せっしょう）は、文字通り生き物を殺すこと。仏教でも最もしてはならない行為として戒められました。始めは人を殺すことを禁じた戒が、後にすべての生き物への「:不殺生戒」（ふせっしょうかい）として拡大されたと言われます。

殺生を自ら行なうのも、それをさせるのも、それを傍観するのも禁じられました。とは言え、生きていたものを食べなければ生きていけません。いろいろな緩和条件を設けて、食物を調達したようです。

関西では「殺生なことやな」などと日常使いますが、「むごいこと」「ひどいこと」を指して言います。

小規模保育を開始■

真理学園幼稚園では、本年4月から園内で「小規模保育」を始めました。対象は１・２歳児で、定員は18名です。これまで10年以上にわたって2歳児保育（さくらるーむ）を行なってきましたが、1歳児の保育は初めての経験です。やっと歩き始めた子ども達と、どんな風に一日を過ごしていくか模索の毎日です。

小規模でも保育所として認定された事業なので、入園の決定は市役所が行ないます。また、園内で調理した給食を提供しなければならないので、調理のスタッフも加わりました。今後は、いろいろ工夫しながら、幼稚園らしい保育を展開できればと考えているところです。

△　1・2歳クラス（ふじ組）の保育

◆平成３０年度学校評価◆ 学校法人　真理学園

＜法人全体＞

・経理職員の交代。（経理事務管理の適正、効率化を促進した。）

＜神田寺幼稚園＞

・行事の安全確認。（各行事の安全対策に一層努めた。）

・冬の保育開始。（預かり保育の充実をはかった。）

・園舎内の塗装工事を実施。（施設の安全管理に一層努めた。）

＜真理学園幼稚園＞

・2歳児保育を実施。（単独の２歳児保育を試行し、運営実績を積んだ。）

・行事の安全確認。（各行事の安全対策に一層努めた。）

・保育室の照明をＬＥＤ化。（室内照明を明るく安全なものとした。）

・テラスに日除け設置。（夏期の熱中症対策をはかった。）

・送迎バスを更新。（新車両とし、衝突安全性を高めた。）

※以上、平成30年度・学校法人真理学園の実績および評価についてご報告致します。

※本誌も今号で１００号を迎えました。年３回の発行で約３０年続けたことになります。月刊［真理］終刊の後、神田寺と真理学園の広報誌として発行してきましたが、読者の世代も変わり、いつまでも同じスタイルでよいのか、思案しているところです。ご意見などお寄せ頂ければ幸いです。暑い夏、皆様どうぞお元気にお過ごし下さい。

真理通信

第 101 号　令和元年
(2019 年)12 月 1 日発行

叙　景　　表紙を語る

冬枯れの林を歩く。ガサゴソと音をたてながら、枯れ葉を踏み、見通しのよい冬の林を歩く。 樹の姿の美しさに見とれ、思わぬ所に道を見つけ、ずんずん進むと、知らない場所に出てしまう。ここは何処だろうと、しばらく記憶をたどり、振り向く空のなんと青く、透き通っていたことだろう。

随分前の正月休み、富士山麓の冬の林で撮った一枚です。

巻頭

長きも短きも　小さきも大いなるも
浄(きよ)きも浄からぬも
およそこの世にて　与えられざるを
取ることなき　かかる人を
われ婆羅門(ばらもん)とよばん　(法句経　409)

◇新：法句経講義５９◇

＜※「新・法句経講義」は、巻頭ページ掲載の法句経について解説しています。＞

世の中、背が高い人もいれば低い人もいます。右利きもいれば左利きもいる。自分に与えられたものに不満を言っても始まらない。与えられたものを、正直に素直に受け取って生きることが大切ですよ、そうした分かりやすい教えを説いた偈ですが、簡単にはいかない現実もあるものです。

背の高さや利き手くらいは我慢できても、どうしても我慢できないハンディがあったり、境遇に置かれることもあります。折角買ってきた服が汚れていたり、予約したホテルが期待はずれだったり、がんばった試験が不合格だったり、会社が倒産したり、小から大まで、与えられたものに我慢できないことなんで山ほどあるのが現実です。

それでも、与えられたものを素直に受け取れというのがこの教えです。与えられてもいないものに固執して不満を言っても、得るものは何もない。失敗は失敗として取り返すしかないし、才能がないならある人以上に努力をするしかないのです。不満、諦めではなく、前向きに努力する出発点。それが、与えられたものを素直に受け取る姿勢なのです。

＜　管*主管所感*　＞

人生を生かしていく仕事　　友松 浩志

天皇陛下の即位に関する様々な行事が終了して、いよいよ本格的に令和の時代が始まりました。令和になって、「昭和世代」はだんだん肩身が狭くなっていきそうです。まして前のオリンピックを「知っている」我が身の居場所は、益々狭くなりそうです。

前のオリンピックと言えば１９６４年、日本はまだ高度経済成長の入口で、東京の街も木造住宅が多かったように思います。交通機関として都電（路面電車）が幅をきかせて、どこに行くにも都電を利用したものです。

そんな都電に乗っていた時、私は今の天皇陛下に会った（見た？）ことがあるのです。通学で乗っていた都電が、今の国立競技場の近くを走っていた時、ボンヤリと窓外を眺めていると、大きな石垣の芝生の上に一人の少年が立っています。隣に数人の大人の人が、守るように立っていて、少年は熱心に車の流れや、都電を眺めているのです。子どもの私にも、それが当時の皇太子殿下の長男であることはすぐに分かりました。

あれから５０年以上の歳月が流れ、都電は廃止され、東京の街も大きく変貌しました。あの少年は天皇となり、再びのオリンピック。時の流れを感じるのは、言うまでもありません。諸行無常、正にすべては移り過ぎていきます。

といって、「諸行無常」はただ悲しいこと、侘しいことなのでしょうか。もし諸行無常でなかったら、治る病気もいつまでも治らず、子どもはいつまでも子どものまま。つらい仕事も終わらないし、努力してもお金はたまりません。時間が流れ、ものごとが変化することで、私たちは生かされているのです。

冬の猛吹雪のなか、動物たちは［ストーブを持ってこい］とも「コートが欲しい」とも言わず、雪の穴の中でじっと我慢しています。彼らは彼らなりに、春が来ること、芽生えの季節がくることを知っています。

時の流れを知りそれを感じながら、それぞれの［人生を生かしていく］、それが私たち一人ひとりに課せられた仕事に違いありません。

◆お泊り保育◆

ーみんなで作った夏の思い出ー

今年も、神田寺幼稚園、真理学園幼稚園ともに、１学期のおしまいに真理学園幼稚園の園舎で、年長児の「お泊まり保育」を実施しました。カレーをつくったり、森を探検したり、おばけ屋敷に挑戦したり、楽しい夏の思い出をつくりました。

写真は、隣接する雑木林の公園で、一人づつ手持ち花

火をもって、真剣に炎を見つめているところです。親元を離れて友だちと過ごした思い出は少し心細かった分、忘れられない思い出として残っていくことと思います。

仏教豆知識　79	帰依

帰依（きえ）とは、「帰」ーかえる、もどる、身をよせるーと、「依」（呉音で＜エ＞と読む）ーよりかかる、たよる、やすらか、を重ねた言葉で、安心して身をまかせる状態、総てをささげる姿勢を言います。

インド発祥の言葉というより、中国起源の言葉と言えますが、仏教では、仏（ブツ／ほとけ様）・法（ホウ／ほとけ様の教え）・僧（ソウ／ほとけ様の教えを信じる人たち）の三つ（三宝／サンボウ）に「帰依」すること、総てをゆだねることを、最も大切な信仰姿勢として尊重してきました。

仏・法・僧の三宝に帰依する言葉、南無帰依仏（なむきえぶつ）、南無帰依法なむきえほう）、南無帰依僧（なむきえそう）を三帰（さんき）と言い、これはどの宗派でも唱えることのできる、大切な言葉として使用されています。

◆西墓地に仏堂建設◆

神田寺には、江東区の２ヵ所に墓地がありますが、旧安民寺があった西墓地の隣接地に新しい建物の建設が始まりました。これまで、西墓地には休憩所がなく、日常管理は近隣の方にお願いしてきましたが、数年前に隣接地の土地を購入することができ、この度ようやくそこに建物をつくることになりました。

予定している建物は木造２階建で、１階は休憩所兼待合所、２階には小さな礼拝施設をつくる予定です。エレベーターはありませんが、階段やスロープはゆるやかにして、多くの方が利用しやすい施設にしたいと考えています。

１２月には工事を開始し、来年（令和２年）の６月には完成の予定です。檀信徒の皆様には、大変恐縮でございますが、神田寺として念願の施設の建設ですので、若干のご寄付のお願いを申し上げたく、別紙にてご案内申し上げます。

（西墓地の施設ですが、東墓地の方にもご利用頂ける施設ですので、東墓地の皆様にも、　今回、ご寄付のお願いを致しますこと、ご理解頂ければ幸いでございます。）